

# 子育て支援の場における母親の気持ちの変容とそのプロセス

—特別な支援を必要とする子どもの母親の気持ちに着目して—

園川 緑

帝京平成大学 現代ライフ学部 児童学科 保育・幼稚園コース

## Emotional Changes and Thought Processes in Mothers in Child-Rearing Support Programs

—Focusing on Those whose Children Need Special Support—

SONOKAWA Midori

Department of Juvenile Education, Faculty of Modern Life, Teikyo Heisei University

### Abstract

This study aimed to examine the feelings of mothers who have handicapped children and have used community-based child rearing support centers. Some semi-structured interviews were conducted for data collection. Then qualitative analysis was applied to the data. The analysis of their narratives suggested that positive feelings were produced by factors such as 'good relationships with people who showed mutual understanding towards the mothers', 'support centers which offer places where children can play well', etc. On the other hand, negative feelings were produced by factors such as 'lack of understanding towards the parents and their children', 'Some children cannot get along well with their peers', etc.

**Key word** : child-rearing support, mothers, handicapped children, growing together, special support

**キーワード** : 子育て支援、母親、障害児、共に育つ、特別な支援

### 1. はじめに一問題の背景—

#### 1) 子育て負担感の増加

少子化が問題となり、出生率 1.57 の“1.57 ショック”という言葉がニュースで飛び交っていた時期から早 20 年以上が経過した。近年の出生率は、微増傾向は見られるものの、少子化の改善には至っていない。第 1 次ベビーブーム期には 4.3 を超えていた合計特殊出生率は、第 2 次ベビーブーム期には 2.1 台で推

移し、平成の 1.57 ショックをさらに下回り、2005 年には過去最低である 1.26 まで落ち込んだ。2012 年には、1.41 となっており微増傾向は見られるが、欧米諸国と比較するとなお低い水準である<sup>1)</sup>。合計特殊出生率とは、ひとりの女性が一生の間（15 歳から 49 歳までを対象とする）に出産すると考えられる子どもの数のその年の平均値である。少子化の状況下では、子育てに触れる機会がないまま子育てをすることになる母親も増加している。

また核家族化や地域のつながりも薄れる中、限られた人間関係の中で子育てを行うことでさらに子育てを難しくし、母親の子育て不安や負担感も大きくなっている<sup>2)</sup>。特に専業主婦の子育て負担感兼業主婦のそれより大きく<sup>3)</sup>、地域で安心した子育てを行っていくには、新たなつながりを作る仕掛けが必要であると言われている。24 時間子育ての責任を負う在宅の専業主婦の子育ては想像以上に大変であり、それを自分自身も実感し、専業主婦の子育てに支援が必要であると感じた。さらにそれにも増して、障害のない子どもより障害のある母親にストレスが高いことは多くの研究により示されており<sup>4) 5)</sup>、障害を持つ子どもの子育ての場合、大変さは計り知れない。

また、子育ては子どものみならず親も発達するという観点から考えるならば、子育て支援は子どものため、子育て支援のための支援であると同時に「親発達支援」でもある<sup>6)</sup>と言われるように、親に焦点をあてながら支援のあり方を検討することは大切である。

## 2) 子育て支援の場での実例

数年前、ある子育て支援の場での出来事である。とてもこだわりが強い 2 歳の子どもがいた。発達障害が心配される子ども<sup>注1)</sup>だった。なかなか他の子と一緒に遊ぶ姿が見られないことを母親は気にしていた。その子は、時々パニックを起こし、そうなると再び遊ぶことが難しく、母親はあきらめて帰ると言うことが少なくなかった。また発達障害が心配される子どもの場合、子育て支援の場への参加が 1・2 回限りという例も見受けられ、親子のその後が気になっていた。

地域の子育て支援の場は、本来、誰もが気軽に楽しめる場である。しかし、コミュニケーションが難しい子どもなど様々な子どもがいる中で、親子によっては反対にストレスを抱えることもあるのではないだろうか。「障害のない子どもの母親より障害のある子どもの母親にストレスが高いこと」「障害のある子の母親は、将来への不安や育て方についてのストレスが高い」<sup>5) 6)</sup>という結果も示されており、今回は、育児ストレスが高いとされている専業主婦かつ障害のある子どもを持つ母親に着目し、地域の「すべての子どもが共に育つ子育て支援の場」<sup>注2)</sup>の可能性を探りたい。

発達障害が心配される子どもは、子育て支援の場を利用する時に、なかなか好きな遊びや好きな場所がみつからない場合もある。また、気持ちが次々と移って行き、多動になる場合もある。子育て支援の場は、0

～3 歳の異年齢と一緒に過ごす空間であるので、他の子どもへの配慮から母親がゆっくりと過ごせない場合も見受けられる。その親子は、一般の地域の子育て支援の場に参加しても、馴染めない場合があるのではないだろうか。

近年、いわゆる「気になる子」<sup>注1)</sup>が急増しているといわれ、その対応が「専門」機関や「専門」家と言われる人たちにだけ任せていられる状況ではない<sup>8)</sup>と指摘されるように、一般の地域の子育て支援の場でも対応が早急に検討されなければならないだろう。発達障害の子どもにとっては、集団生活への適応が課題になると言われるが、地域の子育て支援の場はたくさんの人と過ごす始めの一歩になることが多い。人の中で楽しめる経験は今後の集団生活でも自信につながると思われ、すべての子どもが“共に育つ子育て支援”の場での経験は重要である。

## 2. 目的

この研究では地域の子育て支援の場において、特別な支援を必要とする子どもがどのように過ごし、母親がどのように感じているかについて確認し、母親の肯定的な気持ちと否定的な気持ちはどのように起こるのか、そのプロセスを明らかにすることを目的とする。

子育て中の母親が肯定的な気持ちを持つことは、子育てにも良い影響があり、母親の気持ちを知り母親支援を行うことは、子どもの支援に直結すると考えられるためである。

## 3. 研究方法

子育て支援の場の利用経験がある障害児<sup>注3)</sup>を育てる母親へインタビューを実施し、母親の気持ちに着目し、その内容について分析する。

また、ここで扱う「子育て支援の場」とは、①子育て支援スタッフがいる、②預かり保育ではなく親子で一緒に過ごす場である、③乳幼児を対象とする。一の 3 つの条件を満たすとする。

インタビューの内容の「子育てが楽しい」「嬉しい」「幸せを感じる」等、湧いてくる「肯定的な感情」とその他「子育てが辛い」「悲しい」等の「否定的な感情」等の“母親の気持ち”に焦点を当て、「人との関係」「活動形態」の切り口で、プロセスを探っていく。

表 1 インタビュー協力者

	子ども年齢 (インタビュー時)	子育て支援の場と子育て サークル利用時の子ども の年齢	子どもの障害について (療育センターでの判定等、医師の診断以外も 含む)
Aさん	12歳	2～7歳	広汎性発達障害・知的障害
Bさん	8歳	4～6歳	広汎性発達障害
Cさん	15歳	6歳～12歳	知的障害
	12歳	3歳～9歳	知的障害
Dさん	9歳	2歳～7歳	広汎性発達障害
Eさん	10歳	1歳半～8歳くらい	診断名なし(運動面の発達に障害あり)

### 1) インタビューの形式

母親は、子育て支援の場で「肯定的な感情」「否定的な感情」をどのような場面でどのように感じているかを知るために、半構造化面接を行う。

### 2) 実施日時：2014年1月～6月の2日間

10:00～13:00(一人約1時間程度)

### 3) 調査の場所：研究協力者の家の近くの集会所

### 4) 研究協力者：主に発達障害児を子育て中の母親5名

研究協力者は、A県A大学内の子育て支援の場の利用経験者の5名である(表1)。今現在子育て支援の場を利用中という母親へのインタビュー依頼も試みたが、子どもが小さく約1時間のインタビューは難しい状況にあり、無理のない協力を依頼した。研究依頼は、文書と口頭で説明し、研究協力の承諾をいただいた。インタビュー時点で、母親の年齢は30代～40代、子どもは主に小学生(一人だけは中学生)であった。すべて、A大学内の障害児に特化した地域の子育て支援の場を経験した親子である。

### 5) インタビュー質問項目

まずは、子育て支援の場に参加のお子様について、①現在のお子様の年齢、②子育て支援の場利用時のお子様の年齢を確認した。また、1歳半健診で心配なことがあった場合、それはどのような内容であったかを尋ねた。

次は活動内容と場所についての質問であるが、親子分離の活動、親子一緒にの集団遊び、親子一緒にの自由遊

びなど、活動ごとにそこで感じたことを自由に語ってもらった。

その次は、人の存在について尋ねた。スタッフや母親仲間について、印象に残っていることを尋ねた。また、遊び時のお子様の他の人との関係についても尋ねた。保護者、他の子ども、スタッフ、他の保護者の方々との関係についての人間関係の広がりがあったかどうかを尋ねた。

最後は、特別な支援が必要なお子さんに特化した子育て支援の場、誰でも参加できる子育て支援の場について感じることを自由に語ってもらった。

### 6) インタビュー質問項目の設定について

親子分離の活動は、親子にとって不安が生じる場合もあり、母親の感情が動ききっかけになると考え、質問した。また、親子の自由遊びと集団遊びはどちらにも良さがある。親子のペースで遊べたり、他の親子との交流を楽しんだり、メリット、デメリットは異なる中で、母親が何を感じているのかを知るために質問をした。

また人との関係を見ていくことは、人的環境を考える上で重要であると考え、特に関係性が大きいと思われる「母親仲間」と「子育て支援スタッフ」について質問した。さらに、子どもの人との関係の広がりを捉えるため、「保護者」「スタッフ」「他の子ども」「他の保護者」との関係について質問した。質問の内容は、母親から発せられる内容を大切に受け取りたいという考えにより、すべて「開かれた質問」とした。

### 7) 分析の方法

インタビューは、研究協力者の承諾を得た上ですべ

て録音をし、その後逐語記録にした。

その逐語記録をデータとした分析は、母親の語りの意味付けを人との相互作用やその過程を捉えることに有効だと考えられる分析方法として、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA とする）でインタビュー分析をした。

M-GTA は、質的研究法の一つである修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのことである。M-GTA は、専門的な援助を提供するヒューマン・サービス領域が最適とされる。サービスが行為として提供され、利用者も行為で反応する直接的やり取り（社会的相互作用）や実践的に活用されることが期待される場合・研究対象自体がプロセス的特性を持っている場合等に適する研究方法である。また、社会的相互作用に関係し、人間行動の説明と予測に優れた理論であることが期待される分析方法である<sup>9) 10)</sup> ことから、人的環境など人々との相互作用を分析し、“うごき”を考察する本研究に適していると考えた。

母親の語りからカテゴリーを生成し、「肯定的な気持ち」「否定的な気持ち」をどのような場面で感じているかを明らかにする。データは、M-GTA の方法論に基づき、概念生成、カテゴリー生成をし、明らかにしたいことを検証した。分析焦点者は、“子育て支援の場で「肯定的な気持ち」と「否定的な気持ち」になる特別な支援を必要とする子どもの母親”とする。

### 8) 倫理的配慮

個人名や団体名を出さないこと、話したいことだけを話していただければ良いこと等を文書で明示し、インタビュー内容の録音の許可をいただいた。また子育て等に支障が出ないように、場所や時間は協力者の都合に合わせて行った。

また本研究は、帝京平成大学倫理委員会の承認を得ている。（承認番号 26-034）

## 4. 仮説

肯定的な気持ちは、遊びの中で子どもの笑顔が見られた時、スタッフや母親仲間とのつながりを感じた時、母親自身の個としての表現が可能になった時等が挙がってくるのではないだろうか。「相談できるスタッフ」や「仲間の存在」など、「人」の存在の大きさが浮かび上がると思われる。反対に、子どもが自由に遊べなかった時や母親仲間やスタッフとの擦れ違いが生じた時には、否定的な気持ちが生まれることだろう。

「子どもが楽しめる活動」そのものが母親の気持ちも楽しく<sup>11)</sup> し、子どもに合った活動の重要性があると思われるが、子どもに合った活動を選択するのもスタッフ、母親の気持ちを受け止めるのもスタッフであることから、それができるスタッフの専門性を持つ「人」の存在が重要なのではないかと思われる。

## 5. 結果と分析

### 1) 「分析ワークシート」作成—分析者（筆者）の視点から—

着目した部分のデータを「具体例」として切り取り、なぜその部分に着目したのかを考え、その内容を解釈し「定義」とした。さらに、その意味内容をひと言にした「概念名」を付け、1枚1枚のワークシートとした。疑問や考えたことは、それを「理論的メモ」欄に記述した。母親の気持ちが表れていると思われる部分から、116 の分析ワークシートを作成した。表 2 はその一例である。

表 2 分析ワークシート 例

概念名 40	発達が違う子どもと一緒に場での複雑な気持ち
定義	一般的な発達の子どもと一緒に過ごす空間で、他の子どもとの違う部分を感じ、辛い気持ちになる。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>・でもやっぱりうちの子は他の子と仲よくできなくて、他の子にやられるとパニックになったりして、そういうのを見ていると自分も辛いなどそういうのを感じて・・・。</li> <li>・うちの子は当時、拒絶反応が強かったので、ちょっと際立って辛いってのはあったんですけど、極力通っていました。</li> <li>・他の子が夢中になってやってるのを傍目に見てて、何にもやっていないのはちょっとつらいな・・・と思ってたんですけど・・・。</li> </ul>
理論的メモ	我が子が楽しく遊べなかった時、母親は辛い気持ちになっている。

2) 概念相互の関係の検討—概念の調整と中心的概念—

前述の概念の検討をし、「似ている」「一部重なる」「どこかに共通性がある」等、関係が深い概念を一つにまとめたり、異なる意味合いがある時には反対に別の概念を考えたりして概念を調整し、新たに「中心的概念」とした。その中で、関係が深い概念が他にみつからない場合は、概念不成立とした。修正しながら、次のように 17 の中心的概念を生成した。M-GTA は量の比較で結果を出すものではないが、語りの中で多く登場したことがわかるよう、具体例の数を表 3 に示した。肯定的な気持ちが表れている概念は、母親仲間やスタッフ等人とのつながりによるものが多く、肯定的な気持ちを引き出すのに、人とのつながりは大きく関係しているという結果だった。

一方、否定的な気持ちが表れた時には、下記の表 4 の中心的概念 12 の具体例数が 17 もあることからわかるように、「子どもが他の子どもと一緒に遊ぶ難しさ」によるものが大変多い結果であった。具体例数のカッコの数字は、今回の研究の対象とした地域の子育て支援の場以外の「幼稚園」や「小学校」等の場面の語りも含めた数である。

関係が深い概念がみつからなかった項目は 16 項目あった。最初のデータから直接作った概念の中で「70. 参加できなくても楽しい雰囲気」「73. 心配な兄弟姉妹のこと」「87. 子どもがなじむことの大切さ」「91. 入園前の苦労」「92. 伸びてほしい子どもへの期待」「99. 支援の場の少なさ」「101. 支援の循環への思い」「108. 心開くことができる学生の存在」「109. 皆が成長する場」等がある。概念名の前にある数字は、概念

表 3 中心的概念 生成リスト 肯定的な気持ち

中心的概念の番号	肯定的な気持ちが含まれている概念の名	具体例数
概念 1	母親仲間とのつながり①—リラックスできる大切な仲間・情報交換の場—	13 (14)
概念 2	スタッフの対応—障害の理解・支援・配慮—	12
概念 3	母親仲間とのつながり②—理解者・共感者—	8
概念 4	スタッフとのつながり—子育ての相談・援助—	6
概念 5	良く遊べる遊び環境—おもちゃ・遊具・広い空間—	5
概念 6	安心できるスタッフ—継続性・相性—	4
概念 7	一緒に遊べるお友達	2 (3)
概念 8	子どもとの良い距離が作れる時間	3
概念 9	母親の気づきと新たな視点—スタッフから—	3
概念 10	母親自身の成長	2
概念 11	子どもにとってなじむ場	2

表 4 中心的概念 生成リスト 否定的な気持ち

中心概念番号	否定的な気持ちが含まれている概念の名	具体例数
概念 12	友達と遊んでほしいと願う母親の気持ちと遊べない状況・一緒に遊ぶ難しさ	17 (19)
概念 13	厳しい他者の目・別に見られる悲しさ	6
概念 14	場や人に慣れない大変さ	4
概念 15	障害受容の辛さ	2 (4)
概念 16	パニックの大変さ	2
概念 17	保護者仲間に理解されない辛さ	2 (3)

番号である。それらは、他に類似例はなく表 3・4 には含まれていないがそれも大変重要な語りであり、今後の課題を考える上で大切にしていきたい。

### 3) インタビューの中に登場した様々な語りの各場面について

この研究では、地域の子育て支援の場での母親の「肯定的な気持ち」「否定的な気持ち」気持ちに焦点を当てているが、過去の気持ちについてインタビューしたため、ここまで挙げてきた具体例は、様々な場面での語りが混在している。それは、下記の表 3 のように 7 つの場面に区分けができる。今回は前述の条件を満たした子育て支援の場について考える研究のため、(2)

「一般の子育て支援広場」(3)「一般子育てサークル」(4)「特別な支援が必要な子どもに特化した子育て支援広場」(5)「特別な支援が必要な子どもに特化した子育て支援サークル」の 4 場面を中心に検討した。地域の子育て支援の場について分析するため、上記の表は 4 場面以外(子育て支援に出会うまでの場面、幼稚園、小学校)から抽出された概念の数はカッコで示した。

### 4) 保護者インタビューから生成した中心的概念とカテゴリー

下記の表 6・7 は、前述の中心概念 1～17 (表 3・表 4) をさらに集約・分析し、カテゴリー化したもの

表 5 インタビューの中で語られたエピソードの時期

場面	1) 子育て支援に出会うまで	2) 一般の子育て支援広場	3) 一般の子育てサークル	4) 特別な支援が必要な子に特化した子育て支援広場	5) 特別な支援が必要な子に特化した子育て支援サークル	6) 幼稚園	7) 小学校 (特別支援学校・学級含む)
----	----------------	---------------	---------------	---------------------------	-----------------------------	--------	----------------------

表 6 カテゴリー生成リスト 肯定的な気持ち

番号	カテゴリーの内容	中心概念番号	肯定的な気持ちが含まれている概念の名	具体例数
カテゴリー 1 母親がつながる環境	共感できる母親仲間とつながり、情報交換でき、子どもと少し離れた状態でおしゃべりもできる (中心概念 1・3・8)	中心概念 1	母親仲間とのつながり① —リラックスできる大切な仲間・情報交換の場—	24 (25)
		中心概念 3	母親仲間とのつながり② —理解者・共感者—	
		中心概念 8	子どもとの良い距離が作れる時間	
カテゴリー 2 理解者であるスタッフの存在	いつも同じで理解してくれ、心配してくれるスタッフの存在がある (中心概念 2・4・6・9)	中心概念 2	スタッフの対応 —障害の理解・支援・配慮—	25
		中心概念 4	スタッフとのつながり —子育ての相談・援助—	
		中心概念 6	安心できるスタッフ —継続性・相性—	
		中心概念 9	母親の気づきと新たな視点 —スタッフから—	
カテゴリー 3 子どもが楽しめる遊び環境	お友達と一緒に好きな遊びで楽しみ、成長する我が子の姿を確認できる (中心概念 5・7・11)	中心概念 5	良く遊べる遊び環境 —おもちゃ・遊具・広い空間—	9 (10)
		中心概念 7	一緒に遊べるお友達	
		中心概念 11	子どもにとってなじむ場	

である。3つの肯定的なカテゴリーと3つの否定的なカテゴリーに分類した。また中心的概念と中心概念の関係性から「うごき」を捉え、図にした。

カテゴリー1は、母親がつながる環境とした。「お母さんたちで・・・共感する話もあったけど・・・ちょっと（子どもと）離れることでリラックスできるっていうのはすごくありがたい」（概念17）というように、母子が少し離れてリラックスできる環境があると親どうしで話ができ、そこでつながりを感じていた。そして、母親が他者とつながることは、「すごくすっきりして帰ってきた感じです」（概念45）、「話ができる人がいると行きたいなと思う」（概念55）「共感できる場が私にとっては救いだった」（概念61）等、母親の肯定的な気持ちにつながっている。

「共感できる母親仲間と情報交換でき、子どもと少し離れた状態でおしゃべりできる場」として、子育て支援の場がリラックスできる場として語られた。母親仲間とのつながりは表6にもあるように実に多く語られ、情報交換できることの良さや共感できることの嬉しさがあり、母親自身のリラックスできる場としての意義も感じていた。「母親どうしがリラックスして話ができる環境」は、「子どもが少し離れた場所でよく遊ぶ」こととの関連が見られる。

カテゴリー2は、理解者であるスタッフの存在とした。「いつも同じで理解してくれ、心配してくれるスタッフの存在」があると、「心配してくれているんだなあと思って行ったことがあります」（概念12）というように、理解者がいると参加継続にも結びついている。また、発達に障害があると場所に慣れるのに時間がかかる子どもが多いが、「何ちゃん何ちゃんとわ

かる関係性だったので・・・」（概念63）、「いつも見てくれるから、徐々に人間関係を作っていくので・・・」（概念11）というように、「スタッフの顔触れが同じであることが安心材料となっていた。そして、子どもの状態を理解し、それに合った対応をすることについてはスタッフに信頼を寄せ、心配をしていることを言葉で伝えるなどスタッフの方側の働きかけがあることも母親の気持ちを和らげていることにつながっていた。

カテゴリー1の母親仲間とのつながりにも通じるところだが、結局、人の気持ちへの影響には“人の存在”が大きい。どんなに立派な建物であっても、中にいる人の人間性・専門性が伴わなければ良い支援はできないだろう。地域には様々な親子がいる。子育て支援スタッフは、様々な状況に対応していく力が必要である。

カテゴリー3は子どもが楽しめる遊び環境とした。「お友達と一緒に好きな遊びで楽しめ、成長する我が子の姿」が語られた部分である。「『何とかちゃん遊ぼう』みたいなのは無理で、物を介して遊んでいるという、そういう場面が多かったですね」（概念21）、「遊び道具を介してたまにつながっているみたいな感じ」（概念27）というように言葉ではなく、「物」がたぎ役になっている場面の他、「ボーリングが大好きだったんで・・・そっちの子もやりたいなあっていうのがだんだんわかってきて・・・」（概念22）というように、子ども自身が好きな遊びを見つけ、ゆっくり成長しながら、友達と一緒に遊べたという母の喜びが語られた。また、成長する我が子の姿をスタッフと一緒に喜ぶることについても嬉しいとの声もあり、遊べる状

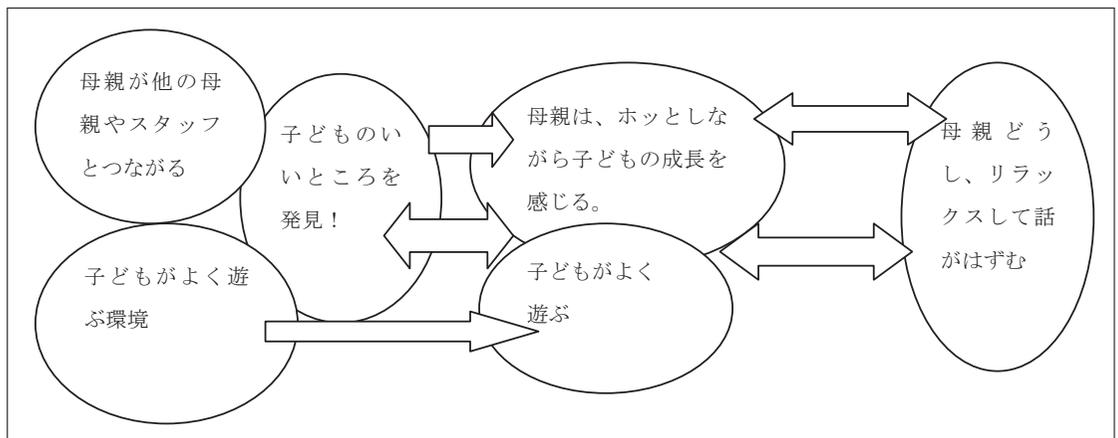


図1 カテゴリー1～3 好循環サイクル

態がスタッフとのつながりを作ることにも関係している。親子が楽しいと感じる遊び（活動）を行うことは親子のつながりを高めることに役立ち、「遊べる」ことで「人と人がつながる」ことになっていく。

よく遊べる環境には、場所や人が関係するが、大人からの働きかけのタイミングも大きく影響し、「あえてセッティングするとうまくいかなくて、誰かが他の遊びをしていて楽しそうだなって思ううちの子も行ってみたいって・・・」（概念 27）というように、子どもの気持ちに合っていることが重要であり、その子どもの今その瞬間の気持ちを捉えつつの働きかけが重要である。

これらカテゴリー 1～3 の肯定的な気持ちは、単独にあるものではなく関連性があり、それを図 1 に示した。

カテゴリー 4 は、子どもが遊べない状態と遊んでほしいと思う母親の願いとした。「場所見しりがあって大変だった」（概念 4）や「やっぱりうちの子は遊べなくて・・・パニックになったりして・・・」（概念 32）に代表されるような遊べない場面に母親は辛い思いをしている。それに関わらず母親の子どもへの思いは強く、「いっぱい連れて行って慣れるのかなって思って、いろんなところに連れていったんですよ」（概念 83）のようにがんばって連れて行くが、実際は「楽しめなかったり、中に入れなかった経験もある・・・」（概念 110）「ぎゃんぎゃん泣いちゃってたし、ホントに悲しくなっちゃって、どうしてうちの子は他のこ

と仲良く遊べないんだろうって泣きながら帰ったこともあるし・・・」（概念 111）、「パニックになったりした時に目立ってしまっていたので、自分自身もその状況がつかったというか、いたたまれなかった・・・」（概念 33）というように辛い思いをしている。母親が子育て支援の場で抱く気持ちは、子ども自身がよく遊べるかどうか大きく影響されている。

カテゴリー 5 は、他者の視線に敏感な母親とした。「いろんな人がいるので、みんないい人ではないので勉強になりました。」（概念 96）、「ギャーってなると『何ごと？』みたいになってパッと見るじゃないですか・・・」（概念 44）のように、母親は他者からの言葉や視線に敏感である。それは、前述の遊べない状況の時によく起こり、カテゴリー 4 と 5 もつながっている。また「歩けないってどういうことなんだろうって思っているのではないかと変に思ってしまって・・・」（概念 65）、「やっぱり何とかさんちの子、あやしいから・・・人の目がやっぱり痛いんだと思うんです」（概念 43）というように、他者の目が気になるという母親の気持ちが語られた。

カテゴリー 6 は、障害受容の辛さとした。「普通のお子さんとは違うんだってわかっていかなくはいけないので、近所の人もいるかもしれないし、『やっぱり・・・』と人の目が痛いんです。」（概念 2）、「〇〇先生の（障害児に特化した子育て支援の場）とは違う日に参加していて、そちらに・・・あえてちょっと・・・受け入れられていなかったと思うんです」（概念 5）のように、

表 7 カテゴリー生成リスト 否定的な気持ち

番号	カテゴリーの内容	中心概念番号	否定的な気持ちが含まれている概念の名	具体例数
カテゴリー 4	子どもが遊べない状態と遊んで欲しいと思う母親の願い（中心的概念 12・14・16）	中心概念 12	友達と遊んでほしいと願う母親の気持ちと遊べない状況・一緒に遊ぶ難しさ	22 (24)
		中心概念 14	場や人に慣れない大変さ	
		中心概念 16	パニックの大変さ	
カテゴリー 5	他者の視線に敏感な母親（中心的概念 13・17）	中心概念 13	厳しい他者の目・別に見られる悲しさ	8 (9)
		中心概念 17	保護者仲間に理解されないと感じる辛さ	
カテゴリー 6	障害受容の辛さ（中心的概念 15）	中心概念 15	障害受容の辛さ	2. (4)

一般の子育て支援の場にも障害児に特化した子育て支援の場のどちらにも、行きにくい気持ちがあることが語られた。

これらカテゴリー 4～6 の否定的な気持ちも、単独ではなく関連性があり、それを図 2 に示した。

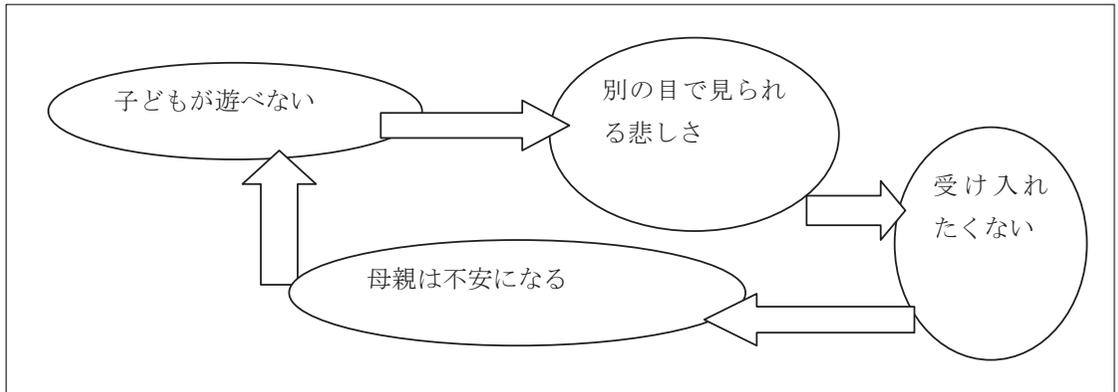


図 2 カテゴリー 4・5・6 悪循環サイクル

## 6. 考察

本研究は、子育て支援の場において、特別な支援を必要とする子どもがどのように過ごし、母親の気持ちはどのように起こるのか、そのプロセスを明らかにすることを目的としたが、母親のインタビューの分析から、子育て支援の場は①子どもが遊べる環境（子ども自身が遊べるかどうか）と、②親子が他者とつながる環境（親子が他者とつながりがあるかないか）—といった側面を持つことが重要であることが示された。仮説では、母親の気持ちへの影響は人の存在が重要であると述べた。それもひとつの柱として重要であるが、子どもが遊べる環境という側面が大変大きいことが示された。仮説でその部分にも言及しているが、想像以上にこの柱は大きいと考えられる。そして、2つの柱は別々に存在するものではなく、お互い影響し合いながら、子育て支援の場の出来事として展開されている。

### 1) 子どもが遊べる環境—すべての子どもが楽しめる遊びの環境設定を—

図 3 はデータから作った“遊べた時”のストーリーラインである。広い場所やスタッフの働きかけにより「遊べた」という場面があり、「遊べる」ようにするために、人的環境、物的環境の両者が関係している。遊べる環境は、個々の子どもによって、そしてその時々状況によって異なるので、すべての子どもが遊べる環境設定というものが一つの“かたち”としてある訳

ではないが、例えば、今回のデータの中で、動きの多い発達障害の子どもにとって、走って遊べるだけのスペースが確保されるということなどが「遊べる」ことにつながっていた。「身体を動かす遊具で良く遊んだ」（概念 48）、「走り回れて助かった」（概念 76）という話もあり、子どもに合わせた環境設定の検討が必要である。

また、その時々で、子どもの遊びへの関心は変化しているため、子どもの状況を捉えることのできるスタッフの存在も大きい。スタッフが子どもへの働きかけのタイミングをつかむことで、子どもがスムーズに遊びに入っていける場面もあった。

集団遊びの提供についての先行研究には、ムーブメント活動の視点を取り入れた親子運動遊びで、子どもが苦手なはずの集団活動にうまく参加し楽しめたとの報告<sup>12)</sup>や、音楽療法的支援が他者との関係を作り出す上で有効であるとの報告<sup>13) 14)</sup>もあり、障害児の特性を生かしながらの遊び環境の設定により、共に遊べる空間は可能となるものと推察される。

母親のインタビューの分析から、子どもが子育て支援の場で楽しく遊べるか、そうでないかの違いは母親の気持ちに大きく影響することが示されたが、母親の気持ちは子どもへの影響も大きいと思われることから、一人ひとりの遊び環境について検討することが重要である。

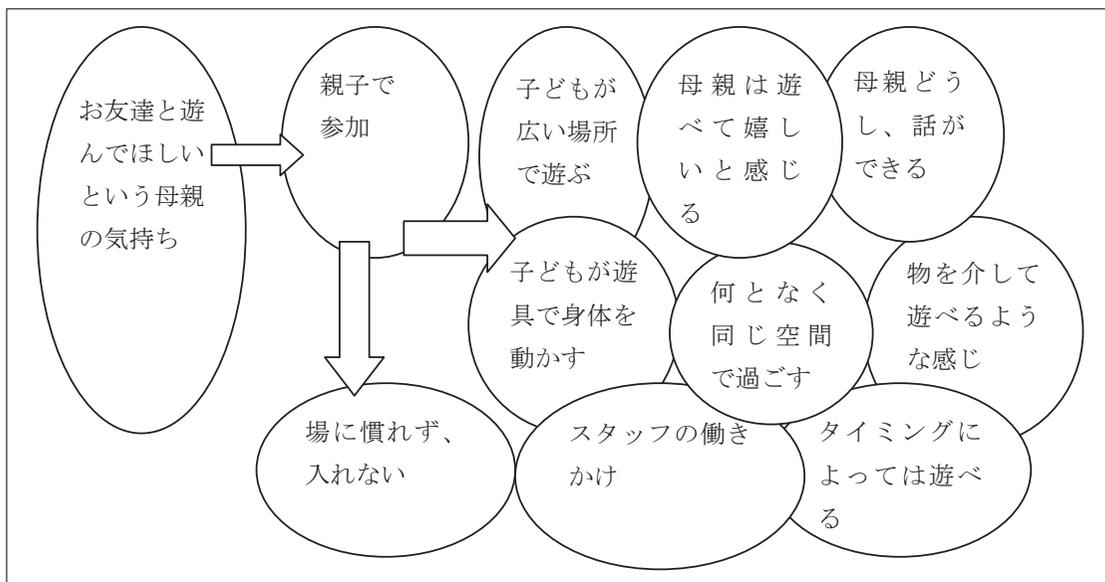


図 3 子どもが遊べる環境

## 2) 親子が他者とつながる環境

### ①子どもが子どもとつながる

東京おもちゃ美術館の館長・多田氏は「おもちゃは、人と人をつなぐコミュニケーションツールにもなる」<sup>注4)</sup>と述べているが、子どもどうしが遊びの中で緩やかにつながっている場面もあり、コミュニケーションが難しい子どもにとって、おもちゃや遊具が間に入ること、そこから共に遊べるようになることがある。おもちゃや遊具が仲介役として子どもと子どもがつながる場面である。発達障害がある子どもは、人やモノへの興味が乏しい場合もあるが、自分の世界に入り込んでしまっているように見える子どもが絵本を媒介にして大人や子ども同士で共感する姿を見せるようになったという研究<sup>15)</sup>もある。間にモノが入ることにつながりやすくなると考えられる。

### ②母親と理解ある他者（他の母親・スタッフ）とつながる—他者と共感できる—

「大変だった時期を乗り越えられたのは、〇〇（支援の場の名称）のおかげかな。つながりって、大きくなって・・・」（概念 102）、「お母さんたちは愚痴を言い合える仲で・・・」（概念 107）というように、障害児を育てると同じ環境の母親どうして、似ている苦勞を分かち合いながら共感が生まれている。

一方、「発達障害って皆同じ障害ではないから、レベルも違うし・・・ちょっと気を使うこともありまし

た。・・・ちょっと傷ついたんですけど、難しさはあるなって・・・」（概念 52）というように、障害児の母親どうしても障害の重さの違いによるずれ違いもあり、幼稚園に入園できるかどうかという問題を抱えた時期にある障害児の母親同志で、反対に難しい場面もあったことも語られた。それぞれ異なる立場にあるが、そのことを理解しようとする人の存在は大きいだろう。

### 3) 「子どもが遊べる環境」と「親子が他者とつながる環境」が母親の気持ちを変える—一次世代のために役立ちたい—

子育て支援の場において、①子ども自身の遊び方（子ども自身が遊べるかどうか）②親子と他者とのつながり（親子の理解者がいるかいないか）の2点が母親の気持ちに大きく影響するということが示された。どちらも子育て支援の場のあり方を考える時に重要な要素である。そして両者は別々に存在するものではなく、相互に関係している。母親が他者とのつながりを持つことでホッと、その雰囲気の中で子どもがよく遊ぶこともあれば、子どもがよく遊べる環境の中で母親の肯定的な気持ちが引き出され、他者とのつながりが作られやすいということもある。肯定的な気持ちの中には「共感できる」や「理解される」や「遊べる」等があり、否定的な気持ちの中には「遊べない」「理解されない」「障害受容の辛さ」があり、「親子が理解されるかどうか」「子どもが遊べるかどうか」という

ことが母親の気持ちに大きく影響していた。それらは影響し合うものであるため、どこかで好循環サイクルに入っていくために、まず「親子の理解が進む働きかけ」「子どもが遊べる環境設定」の部分で介入していくことが良いのではないだろうか。“すべての子どもが楽しめる遊びの環境設定”について追究していくことが必要であるが、障害児のための環境設定は個別対応が必要であるため、それを検討することは結果としてすべての子どものための環境設定になると考えられる。例えば、障害のある子どもが楽しめる遊材を考えることで、すべての子どもにとって楽しい遊びを構成することになった<sup>16)</sup>という研究結果のように、障害児を大切にできる社会は、すべての子どもを大切にできるユニバーサルな社会である。それは障害がない子どもにとっても優しい社会であるため、その部分に焦点を当てながら支援の場を作っていく必要があるのではないだろうか。

また特別な支援が必要な子どもとその母親を支えることができる支援の場は、親どうしが共感できる場として、障害児に特化した支援の場の設定も大きな意味があると思われる。一方、「括られると思うとなかなか行くのに勇気がある」という声もあり、まだ障害と判定されていない段階で、特別な場に行くことに対す

る抵抗感もあることから、一般の子育て支援の場が誰でも参加しやすい場となることが求められる。すべての地域で、一般の子育て支援の場が「共に育つ子育て支援の場」になる必要があるのではないだろうか。障害児に特化した子育て支援の場と一般の子育て支援の場とどちらも自由に選べるような状況になることが望ましいであろう。

図4は、悩める時期から、支援の介入を経て、「次世代のために役立ちたい」という母親の気持ちのプロセスを示した。親子で支援を受けながら、障害児を育てる次世代のために心を馳せることができるようになったことが語られた。障害のあるなしに関わらず、子育ては一人で抱え込むことのできるものではないが、周りの人の理解がない場所には親子で出かけることが難しくなる。理解者がいて安心して親子が出かけられる場所が必要である。その時に、母親同士がお互いの理解者・共感者ともなれば、また出かけたいたいという気持ちになり、子どもだけではなく、母親の世界も広がる可能性が出てくる。

まずは、子育て支援の場に参加することからこのプロセスも生まれてくる。参加しやすい子育て支援の場を作ることが重要である。

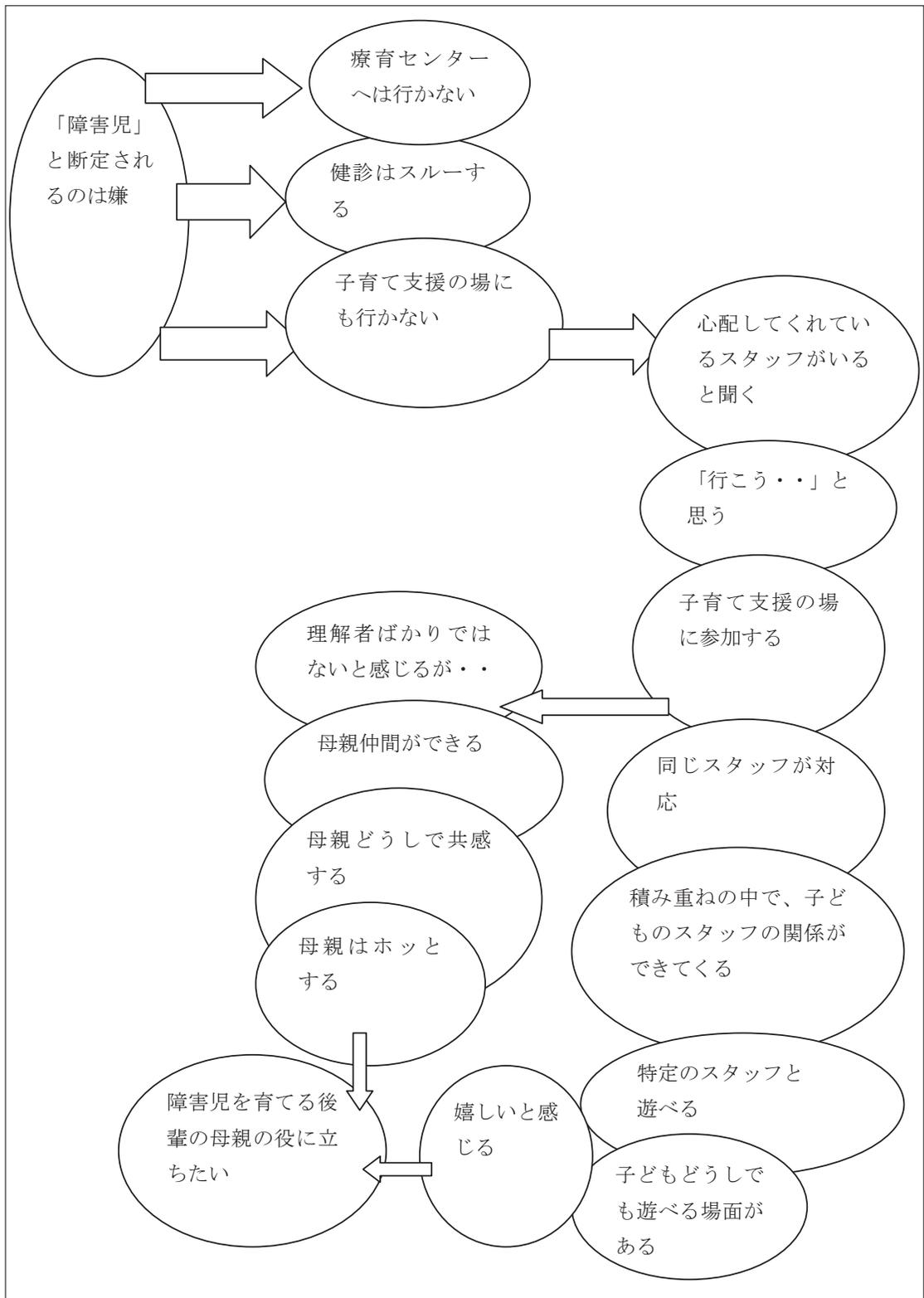


図4 「簡単には受容できない」から「後輩のために役立ちたい」のプロセス

## 7. おわりに—今後の課題—

子どもの笑顔はそのまま母親の笑顔につながる。母親インタビューで、場や人になかなか慣れないこと等、子どもたちの遊びの中での苦労や母親が動揺する気持ちが語られたが、何と言っても圧倒的に多かった（具体例数 15）のが、「一緒に遊べない悲しさ」と「お友達と一緒に遊んでほしい」という母親の気持ちであり、パニック等の行動については、周りの人に対する配慮をしながら苦労している母親の姿があった。共に育つ子育て支援の場にあり方について考察してきたが、今後は共に育つ子育て支援の場ですべての親子が共に楽しめる人的・物的環境設定について研究していきたい。

多様なニーズに対応できるよう、保育・福祉・精神保健等の統合された支援集団での共有の必要性が示されている<sup>17)</sup>が、保育士だけではなく視点が異なる多職種のチームアプローチを検討していくことも必要であろう。また、インタビューの中で、障害を持つ子どもを育てる引き続きの苦労も語られたが、幼稚園や保育園等との継続性を持たせた支援の研究等、様々な角度からの研究を積み重ねることで、“共に育つ子育て支援の場”の可能性が広がると思われる。

### 注

注 1) 「発達障害が心配される子ども」とは、子育て支援の場利用時点で障害の診断を受けてはいないものの、子育て支援スタッフ等が何らかの「特別な支援が必要であると考えている子ども」を指す。また急増していると言われている「気になる子」も、障害の診断は出ているわけではないが、集団での対応が難しいなど、保育や教育現場のスタッフが「気になる」としている子どもを指している。

注 2) 心身に障害をもつ児童も、そうでない児童も一緒に保育することを「統合保育<sup>7)</sup>」または「インクルーシブ保育」というが、この論文において「心身に障害をもつかどうかの診断は出ていないものの発達に心配がある子どもとそうでない子どもが子育て支援の場で一緒に親子で過ごす場を「共に育つ子育て支援の場」とした。

注 3) この研究では、障害の診断を受けていない時点からの母親の気持ちを聞くものであるが、インタビュー時点では子どもの障害がわかっていることから「障害児」とした。

また障害の「害」の表記は、我が国の法律が漢字を用いていること、「害」は本人側ではなく社会のあり方にあるとの考えから、ここでは漢字表記とする。  
注 4) 四谷にある東京おもちゃ美術館館長多田千尋氏が、おもちゃの専門家を養成するおもちゃコンサルタント講座やおもちゃ関係のシンポジウム等で述べた言葉である。

### 引用文献

- 1) 平成 26 年版 少子化社会対策白書全体版 第 1 章 少子化の現状 3.  
<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2014/26pdfhonpen/26honpen.html> (2015.4.5 取得)
- 2) こども未来財団「子育ての孤立化と負担感の増加」  
[www.mhlw.go.jp/shingi/2009/10/dl/s1013-5e-02.pdf](http://www.mhlw.go.jp/shingi/2009/10/dl/s1013-5e-02.pdf) (2015.4.5 取得)
- 3) こども未来財団「子育ての負担感」  
[www.mhlw.go.jp/shingi/2009/01/dl/s0108-4b\\_0159.pdf](http://www.mhlw.go.jp/shingi/2009/01/dl/s0108-4b_0159.pdf) (2015.4.5 取得)
- 4) 伊藤由美 (2006). 「母親のストレスへの支援に対する現状と課題—養育と就労の関係から—」科研費研究「障害乳幼児を抱えて就労している保護者に対する地域の特色を生かした 教育的サポート」研究成果報告書 1-6.
- 5) 角張慶子・小池由佳 (2013). 『『子育て支援』が親に与える影響について—『親の居場所』の利用による子育てにおける変化』人間生活学研究 Vol4 41-50.
- 6) 滝村雅人・種丸武臣・野中壽子・奥平俊子 (2008). 「発達障害児とその保護者への支援の必要性」名古屋市立大学大学院人間文化研究所人間文化研究 第 10 号 171-181.
- 7) 山縣文治・柏女靈峰編著 (2013). 「社会福祉用語辞典 第 9 版」ミネルヴァ書房
- 8) 櫻井慶一 (2015). 「保育所での『気になる子』の現状と『子ども・子育て支援新制度』の課題：近年における障害児政策の動向と関連して」生活科学研究 VOL.37, 53-65.
- 9) 木下康仁 (2007). 「ライブ講義—M-GTA—実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー—アプローチのすべて—」弘文堂
- 10) 木下康仁 (2010). 「グラウンデッド・セオリー—

アプローチの実践」弘文堂

- 11) 園川 緑 (2013). 「親子ふれあい歌遊び実践における母親の気持ち」第 66 回日本保育学会発表要旨集 527.
- 12) 阿部美穂子 (2014). 「発達に気がかりがある子どもの社会的スキル獲得を目指した子育て支援実践—親子ムーブメント活動を活用したプログラムの検討—」保育学研究第 52 巻 第 3 号 55-68.
- 13) 和田幸子 (2008). 「わらべうたを用いた障害児保育実践—遊びの構造分析による事例—」保育学研究第 46 巻第 2 号 225-234.
- 14) 谷村宏子 (2012). 「音楽療法の視点に立った保育支援の試み—実践記録の分析と新たな提案—関西学院大学出版会 29-30.
- 15) 近藤みえこ子・山本理恵 (2013). 「集団での絵本の読み聞かせを通しての自閉症スペクトラム幼児の発達支援—共同注意・情動の共有に着目しての実践の分析より—」保育学研究 第 51 巻 第 3 号 32-44.

- 16) 松井剛太 (2013). 「保育本来の遊びが障害のある子どもにもたらす意義—『障害特性論に基づく遊び』の批判的検討から—」保育学研究第 51 巻第 3 号
- 17) 星三和子・塩崎美穂・向井美穂・上垣内伸子 (2014). 「地域子育て支援拠点における困難や悩みをもつ親の支援に関する考察—支援職の「語り」の分析—」保育学研究第 52 巻第 3 号 22-33.

付記：本稿は、2015（平成 27）年 5 月 9 日・10 日に開催された第 68 回 日本保育学会大会、2015 年 8 月 1 日・2 日に開催された第 14 回 日本ストレスマネジメント学会学術大会に於ける発表内容を合わせた上で、加筆・修正したものである。

謝辞：研究にご協力いただきました保護者の皆様、子育て支援スタッフの皆様、お忙しい中、丁寧にご教示いただきました放送大学大学院 人間発達科学プログラムの森津太子教授に感謝致します。